

日産財団理科教育助成 成果報告ポスター

2023 年度助成（助成期間：2022 年 4 月 1 日～2023 年 3 月 31 日）

テーマ	「人・もの・こと」と豊かに関わり、自己の学びを創り上げていく子どもの育成		
学校名	小野町立小野小学校	役職 代表者名	校長 小荒井 新佐

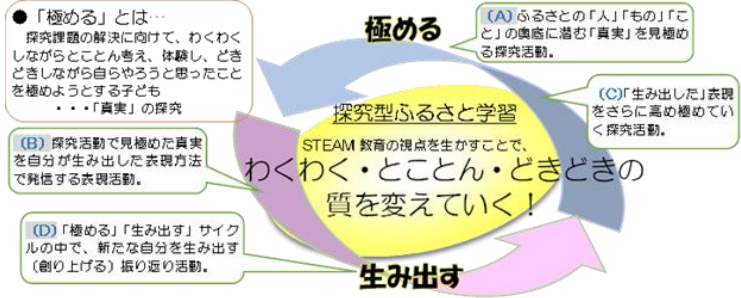


研究の目的：

本校では、STEAM 教育を小学校教育に取り入れるために、「極める」と「生み出す」という2点を授業改善のキーワードとして設定した。今年度は、特に「極める」を重点的に実践化することとしたが、これは子どもたちが、あたかも科学者や芸術家のようにその道や頂を極めることができるように先生方が配慮し、促してあげることにより、探究活動の過程において、各教科等における見方・考え方を総合的に活用して、広範な事象を多様な角度から俯瞰してとらえ、実社会・実生活の課題を探究し、自己の生き方を問い続けることができるようになったからである。

研究の内容：

- 生活科・総合における「探究型ふるさと学習」
- 「脱研究授業」から単元を通した子どもの変容を見取る「実践報告会」へ
- 子どもの成長を価値づけ、経年的な変容を見取る学習意識調査を活用した研究評価



研究の成果とその訴求点：

教師の児童の姿の捉え方と児童の意識との関連図（第3学年の例）

【報告会で教員によって価値付けされた児童の姿（3年）】
2022 10月実施

- 【学習動機】
- 実際に黒ニンニクを食べる姿（1組）
 - 低学年へプレゼントという意識をする姿（2組）
 - 自分だけの特別な羅漢様を見付ける姿（3組）
- 【感じ取る力】
- 黒ニンニクを作る農家さんのかっこよさに触れる姿（1組）
 - カルタ作りをする中で、人へプレゼントするものとして互いにできたカルタを判定する姿（2組）
 - 実際に羅漢様をみた児童が友達にそのよさを伝えようとする姿（3組）

【ベネッセ総合学力調査 児童の意識調査の結果（3年）】
2022 12月実施

質問内容	昨年度	今年度
みんなで決めた目標や、めあてに力を合わせて取り組んでいる	75%	96% (+21)
勉強したり遊んでいたりにして「不思議」「なぜだろう」と思う	58%	76% (+18)
最後までやりとげて嬉しかったことがある	81%	93% (+12)
何かがわかるようになったりできるようになったりすることは嬉しい	92%	99% (+7)
勉強していて「楽しい」「おもしろい」と思う	85%	92% (+7)
自分の力をもっと伸ばしたい	91%	96% (+5)



学校名

小野町立小野小学校

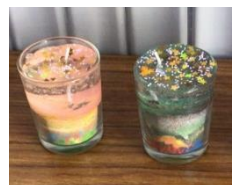
1年生なのにペットボトルロケット・ソーラーカー・スライム etc

1年生でも「なぜ、ペットボトルロケットが飛ぶか」「なぜ、ソーラーカーが走るのか」「どうしたらきれいなロウソクを作ることができるのか」ということが語れるようになった。それは、彼らがおもちゃを自己選択・自己決定を介してして選んだからであり、実際に苦労を体験して作ったからであった。また、1年生の発達段階的には難しい「STEAMトイ」を作り上げる過程で、6年生や友だちと語り合ったからでもあった。本校では「極める」学習活動を重視したが、極めるために、出発点として「自己選択」「自己決定」というその子なりの story が必要であることが確認できた。「あのね、この私がつくったロウソクはね、妹のお誕生日に火をつけるんだ。」と語っていた子はどんなに作るのが難しくても涙を流すことはなかった。



「極める」学びが生み出した ANOTHER STORY

本校では、1単位時間の授業を参観して検証を行う「研究授業」をやめて、年間や単元をとおして担任がとらえた子どもの成長を「実践報告会」という形式で先生方が共有できるようにした。授業には1時間や単元の流れがある。しかし、子どもたちの様々な成長には、その流れとは異なる story がある。それを本校では「ANOTHER STORY」と位置づけているが、STEAM 教育を自校化するために「極める」という視点を生かして生活科や総合的な学習の時間を先生方と子どもたちが極めていった結果、たくさんの「大切なもの」が生まれた。ここでは、「生み出された」ものをとおして、研究の内容を語っていききたい。



「水博士」になろうと9カ月!

4年生は、「水博士になろう」というテーマのもとに総合的な学習を進めてきた。9カ月もずっと水博士になろうとがんばってきた。その間、研究発表プレゼンをした回数は、練習も含め、10回を数えた。招聘した本当の「水博士」を相手に2回もプレゼンをした。ほめられもしたけど、ダメ出しもされた。あるグループが取り組んだ「一瞬で凍る水」は、うまくいかないことの方が多かった。それもそのはずである。「過冷却」を4年生が極めようとしていたのである。とうとう担任は、ある日、教室に冷蔵庫を設置した。

6年生が描き上げた壁画の ANOTHER STORY

幅10メートルの壁画を6年生が卒業記念として描き上げた。小野町の歴史が絵巻物のように平安時代の「小野小町」から未来までつながっている壁画であるが、それは、6年生一人一人の思いが込められた「壁画プロジェクト」だった。「なぜ、そのシーンを壁画に入れないか」「その絵に表されたものにはどんな歴史的事象が隠れているのか」「服の時代考証は?」「小野町の未来はどうなってほしいのか」…それらをすべての子どもがこのプロジェクトの一翼を担い、語るができるようになっていた。6年生の77名の77の ANOTHER STORY が、この壁画である。

小野町特産の黒にんにくの カルタを作っただけなのに…

3年生は、「小野町じまん」に「黒にんにく」を極めた。生産者の方を「かっこいい」と感じ、黒にんにくがもっと売ればいいのにと思った。その思いが50枚のカルタになった。それは50枚の ANOTHER STORY だった。そのお手製のカルタを黒にんにく直売所に展示させてもらった。老人ホームの方の目にとまり、老人ホームでカルタ大会をやり、町長さんを表敬訪問するようになり、新聞にも大々的に取り上げられてしまった。担任でさえも、子どもたちでさえも考えなかった ANOTHER STORY が広がった。子どもたちの発信が、地域の人々を動かした。「学習発表会」にステージは必ずしも必要ではないことを先生方が思い知った学びだった。

